みやぎ教育文化研究センター

センターつうしん

NO.105

GIGAスクール問題Ⅱ

子どもの風景 第4回

かいらん板をとどけに行ったこと

小川　柊（小3）

ぼくは児童館から帰ったらキックボードで遊びました。遊び終わって家にもどったらお母さんが、

「菊池さんのところにかいらん板をとどけに行ってちょうだい。」

と言いました。ぼくは、

「菊池さんの家ってどこ。」

と聞きました。そしてお母さんが、

「オレンジのポストの家だよ。」

と言いました。ぼくは、

「分かりやすい。」

と聞きました。お母さんは、

「分かりやすいよ。」

と言いました。そしてぼくは、菊池さんのところにかいらん板をとどけに行きました。ぼくは、

「ほんとだ。分かりやすい。」

と言いました。

かいらん板をとどけた後、家に向かって帰ろうとしたと中、月が見えました。月は大きくてきれいでした。その月をながめながら帰りました。

ぼくは、家に着いて中に入って、

「ただいま。」

と言いました。お母さんが、

「おかえり。」

と言いました。そうしたらお母さんがヨーグルトをくれました。おいしかったです。また一人でかいらん板をとどけたいです。

目次　2021年12月

子どもの風景（第４回）　1
座談会
「GIGAスクール　学校現場の今と課題」　2
GIGAスクール構想の学校での現状をお聞きして　久保　健　12
読者の声（はがき・メールより）　12
授業への招待④
五七五の世界が紡ぐ世界　小野寺浩之　14
教育時評
埼玉超勤訴訟の成果と課題　山岸　利次　16
子育て、孫育て奮闘記③　阿部　真弓　18
おすすめ映画
『私は、ダニエル・ブレイク』　佐々木忠夫　19
読書のすすめ（第６回）　久保　健　19
子どもと学校
清少納言も悩んでいたのかもしれない　石垣　耕希　20
わたしの出会った先生 34
ひとりはみんなのために、みんなはひとりのために　出浦由美子　22
相談センター報告　（第25回）
大人があなたたちの幸せを守る　金谷　光子　23
ひと言　何のために学ぶのか？　高橋　満　24
子どもの風景　作品について　千葉　早苗　24
センターの動き・編集後記　24

表紙写真：遠藤利美　題字：江島隆二

座談会　2021・10・2

GIGAスクール 学校現場の 今と課題

当センターでは、夏から秋にかけて県内の教職員を対象に「GIGAスクールアンケート」を実施してきました。このアンケートでは、GIGAスクール構想に対する立場はフラットにしたままで、今、学校で何が起きていて、教職員が何を感じ・考え・悩み、何をしているかについて調査することを目的にしました。

次に必要になるのが、このアンケートの中から「何が問題か」「どうして行くべきか」等々を拾い上げ、より突っ込んだ検討をすることです。その方向性を探るために、10月23日に県内各地から先生方5人とセンターの研究部員に集まっていただき、それぞれの地域・学校・教員の中で起きていること、やっていることについて座談会と意見交流を行いました。その時の記録を編集したものです。

●学校現場からの報告
伊藤　慶（富谷市）
掛川　恵一（仙台市）
佐藤　正彦（登米市）
森　峻平（白石市）
渡邉　浩一（七ヶ宿町）

●研究部メンバー
数見　隆生　久保　健
鎌田　克信　後藤　篤
菅井　仁　千葉　建夫
山沢　智樹　本田　伊克
（司会　高橋　達郎）

（研究部員）小・中学校にほとんど一人一台タブレットが配られ、それを使って何をやるのかが問題になってきています。

今日はそういう状況のなかで、現場の先生方に学校や身の回りでタブレットが配られたことをきっかけに一体何が起きてきているのか。何が問題になってるのか、なりそうなのかを交流したいと思っています。

各地域の学校の実態

（掛川）職場で話題になっていたのは、市内の学校でグーグルミート[注1]を使って〇〇しましたみたいな取り組みのニュースです。そうすると我々もやらなくてはいけないみたいな変な圧力を感じて、先進校に合わせて進めなくてはというような空気が醸成されているところがあります。これからの取り組みとしては、簡単な勉強に関するクイズを出して、持ち帰ったタブレットで答えて送るとか、担任が作った短い動画を家庭で見るとかです。うちの学校は、負担のないところでやってますが、学校によって負担の差があると思います。

ミートで繋げば授業が成立し学習空間が成立するみたいな感覚というか、そういう空気は学校の中にも出てきているのかなと思っていて、それをまずできるようにしなくてはいけないみたいなことが到達目標として設定されているところがある。それから今年度中に学校として低・中・高の学年ごとの最初のスタートはここまで、中期はここまで、最終的にはここまでという目標を立てることになっている。ロイロノー

トを使ってなんとかできるって、ロイロノートもまだわかってないのに目標を立てられるか？　という感じです。(注2)

(伊藤) 富谷市は、１年前から子ども、先生全員にドコモ契約のiPad(注3)を配布しました。

ＧＩＧＡスクールという言葉は使いません。iPadをどう使うか、どうやってＩＣＴを使うかというイメージでとらえています。

iPadは賢者の石だなと思います。授業の上手な先生が使えば授業の質を上げることにつながるし、授業をちゃんと考えていない先生が使っても、視覚的に動いたりしてくれるので、なんとなく授業に子どもが集中する。でも子どもたちは何を学んだのかと聞いた時に、「？」となるような側面があると思います。１年間使っているので、６年生なんかはかなり上手にiPadを使います。調べ学習をするとiPadでインターネットを調べて必要なところをコピーして、切り抜いたりスクリーンショットして、新聞とかをお手の物で作っていく。全員静かにiPadで授業を受けているわけです。それを授業に集中しているとみることもできるかもしれないけど、それで授業なのか？　という疑問も感じます。

体育の授業では、一人一台iPadを持っているので、動画を撮ることができます。だから短距離走の授業では、子どもたちが動画を撮り合って、お互いに《ここ、こうしたらいいんじゃない》《ああしたらいいんじゃない》《今度はこうしてみようか》とかできるのです。でも、その前に例えば言葉を尽くしてしゃべってみて、なんかうまく伝わらないとか、なんかコミュニケーションってすごく難しいなとか、なんかいい方法ないかな？　というような、経験値をとってしまう。うまく行かない感というのは結構重要だと思うのですが、そこら辺が抜けちゃうというところはあるなと思います。

算数で言うと、５年生の体積で１㎥は何㎤でしょう？　という問題が出てくる。以前だったら１㎥ってこれだよって実物大の教具を持ってくる。でもiPadだと、ちょっと大きめな60インチの画面に１㎥ですと出てきて、１㎤はこうなってますと視覚的に示して、それで授業ができちゃう。iPadがあるおかげで便利で理解は深められるけれど、大切な感覚というか、そこが抜け落ちてしまうのではないか。図形の勉強もiPadでやると、画面上で切り貼りがすぐにできるけど、実際にはさみで切ってみるとか、そういうことをすごく大切にしなくてはいけないんじゃないかなと思っています。

調べ学習などでは、新聞・図鑑とネットの違いがあると感じます。図鑑や新聞で何かを調べようとしたときは、周りにいろんな情報が入っているので、自然にそちらにも目が行く。でもネットは自分に興味関心のあるものだけ全部集めてくれる。だから本当に子どもが必要な情報はピッと目につく状況になるので便利かもしれないけど、他のものに目移りする感覚を失うというのはどうなのかなと思います。

ロイロノートというアプリもすごく便利です。ロイロノートを使うと、私が教材や資料のデータを送ると子どもたち全員に一気に拡散する。子どもたちも、先生のところにデータを送るとぱあーと送られてきて、そのデータを掲示できる。そして誰々はこんな考えだとわかる。ただ一方で、相互にコミュニケーションをとる機会というのは失ってしまうのかもしれないなと思います。

(森) 世の中がほとんどネット社会になっているので、今回タブレットが入って、子どもらと一緒にやるというのは一つ大切なことなのではないかと感じてました。便利な道具だと思

うので、怖がって使わないではなくて、ドンドン使っていくことで少しずつタブレットの良さに気づいて使えるようになっていくことが大事なんじゃないかと思っています。使うことで少しずつルールを作っていったり、実践を増やしていくということが大事かなと思っています。

便利な面は、グーグルフォーム(注4)を使うと授業アンケートや親へのアンケートとかも集計が一気にできて楽なので、それを授業に活用できたりする。そういう便利さはどんどん使っていくべきだなと思っていました。

あとはグーグルミートを使ってのオンラインの授業に関しては、うちの学校の場合はさまざまな事情で同じ教室で勉強できないという子がいても別教室で一緒に勉強できる。別室にしか登校できない子にとって、オンラインは少し安心して参加できるということがあるかなと思ってます。

またクラスルーム(注5)というチャットのようなことができるアプリがあるのですが、子どもたちの書き込みを見ると、こうやってラインとかのいじめが起きるんだなということがよくわかります。情報モラルの指導にすごく活かせるなと思いました。スマホのラインとかだと、子どもらがやり取りしていることは見えないし、ゲーム内のチャットでの言葉づかいなどは分からなかったのですが、クラスルームを使うと、こういうふうに書き込んで傷つけているんだなとわかって、その都度少しずつ指導していったらどう書き込むといいかがだんだん分かってきたので、生徒指導面では指導しやすくなったなと思いました。

(渡邉) 山間部の小規模校で、小中ともタブレットは全員持っています。iPadで学習支援のロイロノートというソフトが入っています。

どう使っているかというと、5年生は特別支援学級の子が、家庭科のクリーン大作戦という単元で、窓の桟のところが汚いからそこを何を使ったらきれいにできるかを授業をしたときに、ネットとかにいろいろな掃除道具（スポンジを使ったものとか、歯ブラシをくっつけたものとか）があがっている。そこから自分がいいなと思うものを選んで、その道具の利点をロイロノートの掲示にどんどん張り付けていく。最後に掃除が終わった後のビフォーアフターを使って、自分の成果というかやり方を張り付けて先生に提出して、それを子どもたちみんなで共有して、〇〇君のはいいねとか、そういうふうに使うことができるんです。そういう意味でロイロノートは、学習支援ソフトとして子どもたちが使えるのはいいことだなと思います。

一方で、中学校でロイロノートを使って体育の授業があって、子どもたちが前転をした後に、じゃあ正しい前転の仕方はどうだろうというところを一人一台ロイロノートのiPadを持ってきて、これがいいんだねと先生がやった手本の前転を見せて、その後何をするのかなと思ったら、じゃあ次やってみようとやらせた。どこが違うか友達と話し合ったりすることが大事だと思うのに、そういうことはしないで一人一台という「個別最適化」で、あくまでも学習が個人的なものになってしまい共同での取り組みが見られなくなってしまう。参観していた教育長とか校長は、タブレットを使っていればそれですばらしいねという感じです。

もう一つは、学習教材の漢検ドリルというのがあって漢字の筆順とか漢字を書く教材です。そのソフトを入れてもらって、特別支援の子どもと一緒にそれを使ってなぞり書きをする。そのなぞり書きが少しはみ出たとしても、その学習支援

ソフトは○をつけてくれる。そうすると「先生、少しはずれてても○なんだよね」と言うわけです。つまり、○か×かなんですよ。正答主義に陥っているのではないかと思うんですね。そうすると、どんどん○か×かの世界になってしまって、学びが広がらないというか深まらないんじゃないかとすごく思ってます。

正答主義に陥らないで、いろんな多様な考え方を出すようにということを大切にしてきたのに、ＧＩＧＡスクールで教材とかが入ってくると、どうしても正答主義みたいになってしまっていると思います。学習支援ソフトは子どもたちが使っていい面もあるけど、なんでもタブレットを使えばいいというのではなくて、限定的にこれはタブレットを使った方がいい、これは子どもたち同士が話し合った方がいいなど、考えながら使っていくことが必要だと思っています。

あと中学校はすごく人数が少ないし先生方も熱心なので、どんどん進めています。中学校では家庭に持ち帰り家庭学習などもやっています。しかし保護者からは、宿題をやるけれども タブレットを使って動画を見たりYou Tubeを見たりゲームをしたりすることに使っているという声があります。持って行ったときの運用の仕方とか、使用法などの説明をしっかりしないと、環境が使えるようになっているから持って帰っていいよということにはならないと思っています。

（佐藤）登米市はもともとWindowsのタブレットであるサーフェイスの前身みたいなものが8年くらい前に配布されてました。その時に市教委にサーバーがある校務処理のソフトが入りました。またデジタル教科書も導入されていたので、そういった意味では導入は早かったのではないかと思います。そんな状況下で3月には校内のネット環境が一気に一新して、4月に空き教室にドーンと保管庫が来て、6月にはiPadが3年生から6年生まで全員分が来ました。そこから個人のパスワードを入れたりしました。ただ2年生と1年生は古いパソコンを使うようになっています。私たち教師分も無くて、どうしたらいいんだろうと思いながら、これまでのWindowsのタブレットを使ってます。だから私たちが職員室内で研修するときは、子どものiPadを持ってきて、ログインして入って全員でやったりしています。先生たちはサーフェイスでやってくれ、子どもたちはiPadでやってくれということなんだろうなあと思ってます。

手始めにクラスルームでジャムボード(注6)とスライドとミートを使えるようになって下さいというので、私も5年生担当でジャムボードの方を使っています。子どもたちは新しいおもちゃを与えられたような感覚でやっているので、すごく吸収が早いです。ジャムボードというのは付箋に自分の意見を書いて、それをみんなで見合ってカテゴリー別に分けてという、ワークショップでやるようなものをジャムボードの中でやるんです。すごく子どもたちは喜んでやってました。ただ授業をやっている中でストップさせて「みんな見合っているけど、それで終わったらダメなんじゃない。そこから大事なんだぞ。

貼ってあるのを見て、考えたことをお互いに話し合いしなくてはいけないんだぞ」ということで、話し合いに持って行きました。使ってみて、ジャムボードは道具であって、人と人との話し合いでやっていかないとダメなんだよということを子どもに言っていかないと、確実に勘違いするなと思いました。

タイピングの練習については、プレイグラムというゲーム形式で覚えられるソフトがあって、つねに教室にタブレットを置いているので、ちょっとした空き時間に「先生、タイピングやっていいですか」と言うので、「いいよ、やってろ」というとシーンとしてやっています。タイピングも大事なのかなと思いながら、このままでいいのかなと自分の中でももやもやした感じがあります。またコロナのこともあったので、朝会とかは全部グーグルミートで教室でやっているような状況です。

情報担当の先生も使ったからいいのではなくて、子どもたちにこういうことを感じさせたい、勉強意欲を高めたいということで使って下さいということを再三言っているので、そこら辺さえ間違っていなければといつも思っています。

（研究部員） 森さんに質問だけど、報告の中で〝使いながらルールを作る〟とあったけど、森さんが必要だと思うのはどういうルールですか。

（森） 難しいですね。白石市としても、学校に関係のない事では使いませんとか、大きなルールは決められています。特にグーグルミートに関しては全国的にもニュースになって、そこでいじめが起きてしまったということがあります。だから先生が開かないと使えないということもあったんです。今私が思いつくのは細かいルールです。グーグルミートをクラスで自由に使っていいとした時は、オンラインで繋がってしまうので、使用時間は普段友だちの家に遊びにいくのと同じ時間という感覚を持ちなさい。だから平日は、使っていいのは4時までだよとか、休日も朝10時から夕方の5時までしか使ってはいけないよと決めました。そういうルールは必要かなと思います。

タブレットを自由に使わせてみた時もゲームをしまくって、一生懸命にやっていた係活動とかもしなくなったので、君たちに自由を与えたらこうなったからルールを設定したからねという話をしながら、自分たちが守れないものに関してはルールができてしまうのだから、そこは制限しなさいという話をよくしてます。

後はデスクトップの画像を替えたりグーグルのアイコンを替えたりというのも最初は自由にさせていました。でもある子が自分の顔写真を載せてしまって、それは危ないからダメだよという話をしたり、デスクトップの画像とかいろいろ替えまくったり貼ったりしていたらパソコンの容量が小さいので動かなくなることがわかって、だから初期設定以外にしてはいけないということにもしました。

授業とは何か

（司会） 教育にデジタル端末がもたらす影響について、例えば「問い」と「答え」との間をどう考えるかとか、話し合いが「個別最適化」みたいなことで交流が前とは違うということなどが出されたと思いますが、何かありませんか。

（伊藤） 使ってみての実感ですが、子どもたちはiPadで作業して完成すると達成感におそわれて学習が終わってしまう。「できた〜」みたいな感じで。でも友だちの意見を見るのはすごい楽しみで、見た後でさらに学びを深められるかというと、

そこは丁寧にやらないとなかなかつくれないなという感じです。あ～できた～、うれしい、友だちの見た～、面白かった～、おしまい！　みたいな感じです。リアル体験が消えていくことの危惧、そこは大切にして使っていこうねということは言っていきたいなと個人的に思います。

（司会）リアル体験だよね。あとは結局デジタル教科書だと、今までの写真が全部動画で動くでしょ。そうなると自主編成とか自主教材、好きな教材を子どもたちに教えたいなといった時の、そういう気持ちがだんだん薄れるというか。先ほど伊藤さんが言ったように、大きな紙で実物つくって見せたと言っても、動画の方がおもしろいと言われて、そういう自主編成的な側面での影響は非常に大きいんじゃないかと思うけどね。

（伊藤）興味関心があったり、いろんな教養があっていろんな関心がある子がタブレットを持って学びに向かうとなった時は最強のツールだなと思います。そうでない子にとっても、教師にとってはタブレットを与えると一応静かにしてくれるので都合いいですね。

（研究部員）デジタル教科書などを使って授業っぽくなってしまうという。いろいろ写真とかを出したりして時間がなんとか繋がるというのは先生の考える授業ではないですよね。〝授業っぽいけど授業ではない〟というところの、どういう境界があるのかというのを先生の実感としてどうですか。授業とは何かという。

（伊藤）それに答えるのはすごく難しいなと思います。そもそも授業をどうとらえるのかという問題があります。授業はこういうものだという僕の授業観があって、それに対してiPadのということですよね。一般化して言いづらいところがあって、うまく言えないですけど、何となく流せてしまうんですよ。子どもたちがわかっているような気になってしまうというか。デジタル教科書を使うと平行四辺形が動いたりして、子どもたち〝わあ、すげえ〟とか言うわけです。その〝わあ、すげえ〟はなんかうれしいじゃないですか。

（佐藤）今の話で言えば、平行四辺形が動いて〝わあ〟の前に、たぶん子どもたちが手元でこうやったら求められるのかな、こうやったらいいのかなという、その一作業があって、動いた時に俺の考えは合ってたんだなとか、俺の違うんだなという、自分に鑑みられるかどうかが大事だと思います。ああ俺の成功だったなといった後に、誰々ちゃんのどう？　と人の考えがまた出てきて、そういう考えもあるのかということになれば授業なのかな。一つだけの方法だけでなくて、いろんな考えがあって、それが実は友だちのなかにそういう考えがあったというところで、一人で授業しているのではないなと。そういうところまでがクラスでの授業ではないかと思います。

（渡邉）タブレットを使っていると、みんなタブレットを見てシーンとして一生懸命集中しているから、なんか授業している雰囲気になっているんですよ。その時に、自分でいろいろ試してみて他の人のも見て、俺と違う考えがあるとか、そういうことを考えて、わかるのが授業だと思うんです。タブレッ

トを見ててそうかというのは授業でないと思います。

（研究部員）なんとなくネタがあって、子どもたちがそちらを向いているというような形は作れるというイメージですかね。

（伊藤）作品はでき上がるんですよ。今まで調べたり読めなかった子が、タブレットを使うのはうまかったりしますから、なんとなくきれいにできるんですよね。

（森）教員が道具としてどういうふうに使うかという授業力を高めていくことは絶対大事だと思うんです。ある先生の社会の授業を見たのですが、全部タブレットの中で授業が展開するので、全員がタブレットを見ていて、先生もタブレットしか見てないんですよね。ちょっとこれでいいのかなと思って、もっと子どもたちの様子を見ないとダメじゃないかなと話をしました。そこは気を付けないといけないと思いました。

教材研究をしないんじゃないかという話もあったんですけど、若い先生たちはタブレットをどう活かせるかということでやってないことはないです。むしろ生き生きとしている先生たちも中にはいるので、今の教材研究という面ではある意味一生懸命やることにつながっているのかなあと思います。まだまだタブレット万能ではない。道具としては完璧ではないし、紙の方がいいという子はやっぱり絶対いる。漢字とかの勉強に関していっぱい書くというのは意味があると思うので、まだまだ完璧なものではないということをわかりながら使っていくことが大事なのかなと思いました。

（掛川）学習が個別化されるということの問題がすごく大きいんだろうと思っていて、隣は誰でもよくなってしまうわけです。みんなで学ぶことの意味がどんどん薄れていってしまう。つい最近だと約分の勉強で子どもたちがいろいろ言い出すんだけど、答えが二通りになっちゃって、そんなのありえないんじゃないかというところから、じゃあどうしよう？　と。ほかの子が説明に出てきて、それに対して今の説明はわかるわからないというやりとりをしながら考えていく授業で、俺はいい授業だったなと思った。つまり一緒に学ぶことの意味が確認できたということにおいていい授業だなと思っていたんだけど、そういうものが作りづらいのではないかと思うわけです。一緒に学ぶことの意味、あと学ぶ集団として一年間かけて高めていくということが、学級担任の視点としては必要だと思うんだけど、そういうことがすっぽり抜けて行ってしまう。

（司会）学び合う集団を育てていく。タブレットを前にしたときに、学ぶ集団の成長をどう感じるかという。機械操作は上達するけど、子どもたちの精神的な成長をどう考えるか、見えるかという問題がありますね。

（掛川）授業の中で子どもたちは、説明する〇〇君はすごいなと思うわけですよ。いつか僕もそういうふうになりたいなと思って、参加しているわけですね。それから分からないということも大事だと価値づけられていったりする。そういうふうに学びを深めていく。いろんな人たちが間違いながら、いろいろ言い合う中で学びにも深さがあるという、そういったことを具体的な経験を通して実感していくということ。それは一緒の学びの空間にいなかったらできないことですよ。

（研究部員）子どもたちは学んでいく中で、自分の生活や体験と照らし合わせながら概念や法則や世界をつかんでいく。今まで見えなかった世界が見えるようになるということが授業をしていて、すごく楽しいことなんじゃないかなと思うんです。例えば、子どもたちは教科の授業だけではなくて友だちを知るとか、先生を知るとか、学校を知るとか、地域を知るとか、

たくさん学んでいると思うんです。タブレットを使うことが、一つは先生方が子どもを丸ごと感じるとか理解するということにつながっているかどうか。

あとタブレットを使うということは友だちの字も見なくなるということですかね。子どもたちって「このプリント名前が書いてないよ」というと筆跡を見てわかるという。例えばジャムボードだって、直筆で書いたとしても文字は変わってしまいますよね。イラストも変わってしまいますよね。そういった中で友だちや世界を知っていくということになって、その中に子どもたちが自分の身を置いていくということになるんだろうと思うのだけれども、それはこれまでの学びと引き換えになるくらいのものがあるのかなと思ってます。

（渡邉）デジタルを使う部分とアナログを使う部分をどう棲み分けるかというのが大事なんじゃないかと思っています。デジタルで全部やればいいのか、アナログでやればいいのかという問題でもない。デジタルを使えば、今までアナログでは不器用でダメだったという子が、デジタルでiPadを使うことによって、情報の処理の仕方とかが上手にできるようになったりということもある。子どもを見るという点からすればアナログ的に見ることもできるし、デジタルで見るということもできるし、そういうことはできるんじゃないかなと思う。

GIGAスクールでどういう子を育てるのか

（研究部員）タブレットの使い道みたいなもので一定の便利さと有効性はツールとしてはあると思うけど、どんな人間を育てていくのかというところが、すっぽり抜けていると非常に心配だなと思うんです。小学生の場合には非常に基礎的な人間の生きる力を育てていくところの学校の果たしてきた役割というか、交流させながらいろんな経験を積ませてやっていくみたいなものも、すっぱり話題にならなくなってきているんじゃないか。その辺の学校の雰囲気を聞きたいと思いました。

（掛川）先生たちも疲弊しているから、そんなことを考える暇というか、頭に隙間がなくてとにかく目先のことをやらなくてはいけないという感じがベースにある。そこにコロナが来て、今までのやり方では全然通用しないようなところをそれぞれの学校がゼロから作ってきた。そこに入ってきているものなんですよね。個別化して離れてやる作業だから。そういう意味ではすごい滑走台ができてる状況に端末がやってきたという感じですね。

（渡邉）どうしてGIGAスクールを始めたのかとか、GIGAスクールでどういう子どもを育てていくのか、どういうことに有効なのかとかいうようなことが、最初にないわけですよ。GIGAスクールで端末が来た。じゃあどうするというと職員研修から始まって、誰からも研修をすること、タブレットを使うことについて異論がでない。もともとが我々には説明もないし何もない。大元をまったく欠如してて研修です。タブレットをこういうふうに使います、ロイロノートはこうですというふうにされているから、こういうものを使って子どもたちをどう導いていくのかとか、どう使わせていくのかということが、現場のなかではない。あとは使える人はどんどん使いましょう。使えない人も研修して少しずつ使わせていきましょうということだから、元々の理念がない。みんな知らない。

（伊藤）先生方それぞれで授業観とか学校観が違うんですよね。学校って何だろう、授業ってなんだろうという、その部分が多分あってのiPadなのかなと思いました。

（研究部員）〝言葉を尽くしても何か伝わらない〟という経験というのは、やっぱり子どもの学びにとってすごく大事な経験だと思っていて、最近ロイロノートでいろんな子どもたちの意見を聞いて、学級通信をつくるのが楽になったと友人から連絡が来たんです。すごい違和感を覚えたんです。字に現れてくる子どもの個性というか、書き直しとか消し直しとか、自分の思いでうまく書けないけど書いて出てきたもの、この子は何を考えているんだろう？　こいつは何を思ってこういうこと書いているんだろうみたいなことを重ね合わせていく。たぶんそういう経験をロイロノートを使って拓いていく可能性もあるとは思うけれど、そこは追及していかなくてはいけないと思います。どうあれ〝言葉を尽くしても何か伝わらない〟というところからスタートして学びに向かっていくというような経験は大事にしていかないといけない。そこはやっぱり問わないと、子どもたちの学びとは何なのかというところに刺さるようなところに行かないのではないかと思いました。

設備管理や保証について

（伊藤）富谷市では通信費の問題があります。家に持って帰ってはいけないと言われています。通信費は富谷市が払うことになっています。使っていくとどんどん青天井で通信費が上がってしまう。教育予算にどのような影響を及ぼすのかはちょっと心配しています。通信障害は体育館では使えないとかはあります。富谷市は、昨年度インターネットはできますか？Wi-Fi環境ありますか？　と全部調査し、Wi-Fi専用の機種を預けた家と、いわゆるWi-Fiがなくても通信できる機種を預けた家と。iPadなんだけれども、違うiPadが送られているという状況でやっています。

（研究部員）端末だけでなくて、それに付随する教材があると思うんですけど、教科書会社とか教材会社とか副教材を作れるところから、どういったものが学校に入っていますか。

（伊藤）東京書籍の教科書を主に使っているので、東京書籍のデジタル教科書を使っています。デジタル教科書は教員しか使えませんが、富谷の5、6年生には全員が使える算数のデジタル教科書が配られています。

（司会）前号の通信に、持ち帰らせたらタブレットを壊されたりいろんなことがあって危ないから持ち帰らせないのは当然のことだという話があった。でも地域によっては、七ヶ宿のように持ち帰ってやっているということだね。

（渡邉）少しぐらい落としても大丈夫だと言ってますよ。

（司会）保険をかけてるとかも聞いたけど。それは無いの？

（森）うちの学校では入っているけど、親が選んで入っている。入っていない人もいます。

（研究部員）弁償させられるという前提で？

（森）学校でのことに関しては大丈夫なんですけど、家庭に持っ

て帰って壊したものに関しては家庭の責任ということで、入っているということですね。

（研究部員）石巻では念書的なものを、弁償しますと書かされているみたいな話を聞きました。

研修や多忙化等の課題について

（掛川）何か困った時に市教委には窓口はあっても、そのために学校にスタッフが来るなんてことは全然なかった。市から専門のスタッフが来ているのは、市内では数校で、それも試験的運用という状況です。

（森）白石一小には、市のＩＣＴ支援員さんが週に1、2回来てくれるので助かってます。困ったときにはＩＣＴ支援員さんにここまでやっておいてもらえますかとか、直しておいてもらえますかとかできて助かっている。これが全校に週1日でも来てくれるようになるといい。タブレットをうまく使っていくためには、必ず研修が必要だなと思います。タブレットは道具なので、どううまく使えるかというのは研修しないと難しいと思います。また実践を集めて、実践報告会のようなものがあるとすごく助かると思います。仕事をしながら実践をまとめていくのはなかなか難しいところもあるので、使い方などをまとめてもらえれば、どんどん使っていけるのかなと思いました。

（渡邉）タブレットが入ったのは去年の10月ぐらいで、冬休みの前々日にドコモの方が来校し、3月まで5回、研修が入りました。今年度に入っても4回、ドコモが来て研修をして、コーディネーターの人が中心になって先生方の研修と自分たちで取り組んできたことをオンラインで小学校と中学校で紹介する発表会を実施しました。だから研修としてはかなりやっています。ロイロノートはどう使ったらいいのかということはある程度できるようにはなっています。

（佐藤）教育委員会からは特に支援、指導はなくて、各学校に一任されている状況です。登米市には教育支援センターがあって、そこの研修会で情報教育担当の先生が集められてロイロノートの使い方の研修を受けてきました。そのロイロノートの使い方を、学校の打ち合わせの後の10分とか15分とか小刻みに情報担当の先生から教えられて使ってます。情報担当の先生は本当に堪能なので、放課後とかちょっとした時間にいろいろ教えてくれるんですが、私も年配の教員なので教室でちょっと触ってやっている状況ですね。年配の先生たちは自分も含めてなかなか頭に入ってこない。授業中に情報担当の先生も授業しているのに「ごめん、ちょっと教えて」とか言って教えてもらっているので、やっぱり支援員さんはほしいなと思います。

（掛川）問題だなと思っているのは、コロナ禍もあって今までにない業務もたくさん増えた多忙化のなかで、ＧＩＧＡスクールで端末を持ち帰るたびに誰がどの端末を持ち帰ったのかを名簿に記載してチェックして、また担任に返すというように、整備も管理も自分たちでやらなくてはいけない。市教委からの全員参加の研修は、ミートを使っての一回だけです。後は希望制の研修が何回か。とてもそれだけでは、端末にどんなソフトがあり、それをどういうふうに使えばいいのか理解を深める時間は全然ない。授業をするには、それをわかった上で、授業にどう入れていくかということをやらなければいけないのに、それを理解することができていないから、授業に活用すらできていないし、授業をした時に生じる弊害すらわからないという段階です。

（森）課題ですが、ネットの容量が耐えられないような状況があって、教室で全員で一気にグーグルミートを開くと動きが遅くなったり通信が切れてしまったりということが起きています。全校が一斉に使ったらたぶんパンクすると思うので、ネットが対応できていないなと思いました。またネット環境に、若い先生が得意、ベテランの先生が苦手というのは問題かなと思っていて、学校でルール決める時にグーグルミートはこうで、クラスルームはこういうものでと説明するんだけど、いま一つベテランの先生に伝わっていない。そうするとルールを決める時に難しいだろうなと思うことがあります。

また平等性を考えた時に、タブレットは家に持って帰らせて充電して学校に持って来なさいという形をとっているんですが、そうするとネット環境がない家庭はできません。タブレットの宿題を出してもできない子がいるので、そういう子には〝自主学習をかわりにやっておいで〟と言ったりしている。同じ土台で勉強できない。そこは、やっぱり全家庭にWi-Fi環境を設定するとかは市や県でやらなくてはいけないところかなと思ってました。

注1）〈グーグルミート〉Googleが開発したビデオ会議のアプリ。
注2）〈ロイロノート〉タブレット用の授業支援アプリ。自分の考えをまとめ発表するときなどに用いられる。
注3）〈iPad〉アップルが開発したタブレット型端末。
注4）〈グーグルフォーム〉Googleが提供するアンケート作成・管理のソフトウエア。
注5）〈クラスルーム〉Googleが提供し、ネット上に〝クラス〟を作り、運営・管理するツール。生徒を登録し、クラスを作成し、教材・課題の一括配布・進行チェック・採点を行うことや、生徒にフィードバックを送ることや、質問の投稿もできる。
注6）〈ジャムボード〉ホワイトボードと同じ作業ができるスマートデイスプレー。

GIGAスクール構想の学校での現状をお聞きして

研究部長　久保　健

座談会を読んでわかるように、タブレットの配られ具合も使われ方も、それをめぐる会議や研修、担当者の配置も、トラブルへの対応も、不均等で大きな差があります。また、その中でも重要なのが、タブレットを使ってどんな内容と方法の教育

読者の声

アメリカ兵の自殺者は31,177人（戦死者の4.2倍）、前号で紹介された『私にとっての20世紀』の加藤周一によれば、ミリタリー、インダストリアル、コンプレックス、このシステムの中に入ってしまえば、だんだん専門分野に関する細かい話になっていって、人間的に大きな方針や行き先全体として指示できるような人はいなくなるという事を明記しています。

イラク・アフガン戦争から20年の結論からの出来事ですが、さかのぼって明治維新以来の日本にも当てはまる事ですネ。（齋藤健さん）

がなされつつあるかということですが、これについても大きな温度差と進み具合の差があるようです。

私たちセンターの研究部では、このような現場の実態をできるだけ丁寧に踏まえつつ、今、日本の政府と行政が進めようとしている教育改革、とりわけ教育のデジタル化・ＩＣＴ教育の進行が、日本の子どもの成長・発達にどういう課題を孕んでいるのかを検討していきたいと思っています。

私たち研究部の問題意識は、タブレット等による教育のデジタル化は今日的な時代状況の下、ツールとして使用価値はあったとしても、どのような人間を育てるために、どんな内容をどのような方法で学びを創出していくのかと言う展望なしに、デジタルが一人歩きし、教員が教育者としての主体性を見失わないかという懸念です。同時に、デジタル先進国の例に学べば、教育産業のデジタル・コンテンツによる画一化した教育の普及にとどまらず、デジタル化の名による規制緩和によって学校教育（公教育）そのものの存廃が揺らぐ可能性を心配しています。こうした点を、今後注意深く検討していくつもりです。

――お知らせ――

センターでは今後、アンケートの分析結果に基づいてより突っ込んだ調査や問題の検討を行うことと併せて、ＧＩＧＡスクール構想の進行の中で求められる教育実践のあり方について、二種類の実践研究（①タブレットを道具として使いこなした教育の利点と限界が見える実践、②タブレットを使ってでは難しく対面で目を合わせ肉声をかよわせてこそ可能な実践）をする予定です。その内容は、アンケートの分析結果とともにセンターの『研究年報』第2号に掲載する予定でいます。

また、1月9日に茂庭荘で開催される宮城民教連「冬の学習会」終了後、参加した各サークルの代表に集まっていただき、それぞれのサークルの実践・研究の立場からＧＩＧＡスクール構想をどう捉え、どう対応すべきかについて懇談の場を持ちます。参加歓迎です。

「GIGA スクール構想と子どもが主役の教育」をじっくり読ませて頂き、難解な言葉が占める現場の様子が良く分かり、現場の多忙さ、先生方のご苦労が目に見えてきました。未だスマートフォンを持っていない私なので、時代の波に乗れません。が、この紙面で、いつも感動するのは、千葉早苗先生の子どもの風景と子ども達の作文や詩です。子ども達の心に寄り添い、丁寧に一文一文を読んで赤ペンを入れ、一つの作品を皆で読むことで共感し、人間を知り、生きていく知恵を育む。このとても面倒な仕事を投げず、日々やり通している姿に心がふるえる思いです。

情報の機器を上手に扱える子どもを育てる以上に大切にしたいことは、一人一人は違う個であり、表面では見えない葛藤を抱えていることに気付き、仲間の力を高めていく教育が大切になっていると思います。それが作文教育だと思います。その子の一文を深く読み取る教育を大切になさって頂きたいと思います。

（浅井時子さん）

家で学校の不満をぶちまける高３の娘。「先生に言ったら？　困っていること、納得できないこと伝えたら？」と言っても、「どうせ言ってもダメ。まぁまぁ・・・となだめられて終わる。」とのこと。私はその時思った。自分の意見を言ったところで、大人は受け取ってくれない。自分で解決しなければならないんだ。黙っていれば波風立たないし・・・。

若者の投票率の低さが問題となっているが、学校や家庭での子どもたちとの向き合い方、話を聞く、受け止める！それができないから大人を信頼できない。どうせ投票に行ったって・・・ムダ・・・という気持ちになってしまうのではないだろうか。

（松田悦子さん）

授業への招待 ④

五七五の世界が紡ぐ世界

～冬の作品を中心に～

小野寺　浩　之

一　作品がつなぐ

「それでは学習班ごとに交流」

この声がかかると、教室の子どもたちは「待ってました！」とばかりに4人から5人グループの学習班に机をセッティングする。向き合うやいなや、我先にしゃべり始める……。みんな聞いてほしいのだ。「交流」とは何の事はない、ただのおしゃべりである。朝の会の後、学級通信を読み合っている時のいつもの光景である。子どもたち向けに毎日発行している学級通信には、子どもたちが詠んだ俳句や短歌の作品、日々綴った日記が並ぶ。それを読み合い、思いを共有し合う時間である。

朝ご飯より二度寝選ぶ冬の朝
うずくまりみんな猫背の集団に
登校中こたつをつけて歩きたい
手と足の感覚泥棒寒い風

目覚ましがピピピと鳴って止め二度寝
　ピピカチピピカチ　それでも二度寝
手袋の人差し指に穴開いて
　そこの指だけ赤くなってる
月曜日　朝から冷たい雨が降り
　ドアを開けて行く気失う

「今朝、二度寝して起きたら八時過ぎだった。焦ったあ」

「おれ、最近、コーンスープにハマってるんだよね」

「いいな、こたつあって。俺んち猫飼ってるから、こたつ禁止なんだよね」

皆好き勝手に自分のことをしゃべっている。話題に共通性は見られないが、それでも会話は成立しているのが不思議だ。

とそこに、髪はボサボサのまま、ほっぺを真っ赤にした女の子がやってくる。

「だめだ。最近、寒くて起きられない」

「朝ご飯食べた？」

と尋ねる私に、

「食べれるわけないじゃん。食べたら遅刻するし」

と、あくまでも真面目に、何をさておいても登校したと言わんばかりだ。現在8時40分……。完全に遅刻なのだが、彼女にとっては一時間目の授業に間に合えば遅刻ではないらしい……。

おしゃべりは時に一時間目に大幅に食い込むこともあるが、おしゃべりタイムは朝のけだるさを和らげるのにも貢献している。

二　俳句の目・短歌の心で

風に乗り季節の迷子赤とんぼ
一番星見つけていいことある予感
ストーブの周りで猫が溶けている
道滑り横断歩道の黒選ぶ
寒い朝友達待って体冷え
　行き場のない手　自然にポケットへ
教室に入ったばかりの凍えた手
　あと数分は機能しません
どこからか冷気を感じて探し出す
　地震で動いた二ミリのすき間

何気ない日常の一瞬を、子どもたちは切り取って詠もうとする。「俳句の目・短歌の心」を大切にして詠む。瞬間の心の揺れを作品に凝縮することで、今まで見過ごしていたことが見えてくる。今まで気付かなかったことが

意識されていき、世界が広がっていくのだ。

三　家　族

妹の手よりも長い千歳飴
兄弟で家のミカンの争奪戦
クリスマスツリー越しに父の顔
「寒いね。」と家族集まるストーブ前

雪を見てはしゃぐ弟ワクワクし
「雪積もるか。」と何度も聞いてる
寒すぎて歩くの速く妹が
「待って、待って。」と小走りで来る
母とする夜の雪かきハアハアと
小さな会話が寒さを救う

家族との関係性の薄さが指摘される昨今である。確かに、日記に目を通しても、家族の姿は見えてこない。どこかに出かけた……買い物をした……そんなことがせいぜいである。しかし、俳句や短歌の世界をくぐりぬけた子どもたちの家族を見る目は温かい。

四　学　び

夕暮れの空に輝く一番星
月と星とでトルコの国旗

社会の授業で、和歌山県沖で遭難したエルトゥールル号の事件を扱った後に詠んだ短歌である。相手国のトルコに興味を持ち、自主学習でしばらくトルコについて調べてまとめていた子どもの作品だ。学ぶことに喜びを持ち、学ぶことによって、感動し、学ぶことによって世界が広がる……ずっと、そんな授業を目指してきたが、道は遠い。それでも、このような作品を目にすると、もうひと踏ん張り教材研究してみるか……という気になっていく。私の授業は子どもたちの作品にも支えられてきたのだと、つくづく思う。

五　そして卒業へ

小学生でいるのもあと少し
月曜日最後の給食おかわりし
ランドセル小さく手をふるさよならと
卒カレもめくりめくって後一枚

学校に通える日もあと少し
通学路を踏みしめ歩く
ランドセル・机・ロッカーほぼ空に
刻一刻と別れが迫る
悔いも無く自分らしさを刻みつけ
笑って仲間と卒業したい

現在、担任している子どもたちも、数か月後には卒業が待っている。まだまだ先と思っていても、冬休みが終わると卒業がじわりと意識されていく。これからの時期、毎年、日々卒業に関する作品が寄せられる。学級通信で読み合う毎に、神妙な空気が教室を包む。諍いあり、けんかあり、いじめもあった教室……順風満帆なことばかりあったわけではないが、それでも何かの縁で一緒の教室になり、日々の授業や、修学旅行、学芸会、児童会行事などで力を合わせてきたことを呼び起こしていくのである…。

六　おわりに

「忙しい生活の間に、心に浮かんでは消えてゆく刹那々々の感じを哀惜する心が人間にある限り、歌といふものは滅びない。」（石川啄木）

今回も最後にこの啄木の言葉を引用することになる。この言葉に支えられ、子どもたちの作品に励まされて何とか拙い実践を続けてきた。

一年間俳句・短歌を詠んできて
五百五十句自分の歴史に

そうなのだ。この子どもの作品のように、俳句や短歌を詠み、読み合うことは、自分と自分を取り巻く世界の歴史をつづり、仲間と確かめ合うことそのものなのだ。ここに俳句や短歌に取り組む意義があるのだと思う。俳句や短歌の作品を通してみる子どもたちや、今私たちが生きている世界は、決して捨てたものではないと思える自分がいる。

定年まで、後数か月となった…。私にできることは、最後の最後まで、子どもたちや子どもたちの作品と向き合うことだと思う今である。

（長町南小）

※　具体的な年間計画はあります。必要な方はセンターまでご連絡ください。

●教育時評

埼玉超勤訴訟の成果と課題

山岸利次

はじめに

2018年9月、さいたま市の現役の小学校教員が残業代の支払い及び未払い及び時間外労働の強制という違法行為への損害賠償を請求する訴訟を起こしました。給特法のもと、超勤4項目(注)以外の残業についてもいわば「タダ働き」を多くの教員が強いられてきた状況にあって本裁判の提訴は非常に大きな意義がありました。裁判に並行する形で、教員の労働条件が大きな社会問題となり、教員の「働き方改革」がいわばマジック・ワードのように至る所で語られ、また、給特法そのものも「改正」されました。しかし、「改正」による年単位での変形労働時間制の適用は学校現場のニーズに即応するものとはなっておらず、教員にとっては、職場の労働環境・条件整備をどのように実現していくかはいまなお大きな課題です。こうしたなか、本年10月、本訴訟の一審判決が下されました。結論からいえば、未払い賃金の支払いと損害賠償という原告の2つの請求はともに棄却され、原告敗訴となりました。しかし、その一方で、請求棄却との結論を導出するプロセスにおいて、裁判所が示したいくつかの判断は今後の教員の労働のありかたを考えるうえで大きな武器となるポテンシャルを秘めたものであり、判例史という観点から見ると、確実に大きな前進を示しているということも事実です。このことは、敗訴による否定的評価によって見過ごされるべきではありません。本稿はこうした観点から超勤訴訟について論評するものです。なお、本文執筆にあたり、本訴訟に意見書も提出している高橋哲さん(埼玉大学)の論文(「『聖職』神話への挑戦―埼玉教員超勤訴訟10・1判決の意義と課題」『世界』2021年12月号)を参考にしました。関心のある方はぜひ高橋さんの論文をご覧ください。

(注)超勤4項目とは、法律で認められている教員の時間外勤務(手当支給)①校外学習②修学旅行など学校行事③職員会議④非常災害。この4項目以外は、原則として時間外勤務は命じられない。

1. 労働基準法上の労働時間の認定

本判決で何よりも強調されるべき点は、超勤4項目ではないものを理由とする超過勤務の時間が労基法上の労働時間であると認定されたという事実です。過去の判例においては、超勤4項目によらない超過勤務は校長による命令によるものではないことを理由としてその労働時間性が否定され、教員の自由裁量によるものと位置付けられてきました。しかし、本裁判では労働法にいう「相補二要件説」を採用することで、従来の判例の判断枠組みにアタックしました(本説については先の高橋論文に詳しい説明がありますのでご参照ください)。本学説は労働時間の該当性の判断にあたり、「使用者の関与」と「職務関連性」の程度を評価するというものですが、本判決においては、この説に依拠することで、労働時間の評価にあたり「校長による積極的な働きかけ」「黙示の指揮命令」といった校長による職務命令とは異なる判定基準が採用されました。従来では教員の自由意志による、職務とは関係ないと処理されていた時間外の在校時間から条件を満たす時間が掬い上げられ、労基法上の労働時間としてカウント(=算出・評価)されたのでした。

2. 労基法32条と校長の配慮義務

超勤4項目に該当しない理由による労働時間がカウントされたということは、新たな局面を拓きました。それが校長の時間管理に関わる配慮義務の存在の肯定です。そもそも、給特法は労基法37条に定められた「時間外、休日及び深夜の割増賃金」について超勤4項目に限って適用を除外する

ものであり、労基法32条に定められた労働時間―「使用者は、労働者に、休憩時間を除き一週間について四十時間を超えて、労働させてはならない」「使用者は、一週間の各日については、労働者に、休憩時間を除き一日について八時間を超えて、労働させてはならない」―は給特法下においてもなお教員に適用されるものです。これまでの判例においては、上記のように超勤４項目以外の超過勤務はそもそも労働時間として評価されてきませんでしたので、労基法32条が問題となることはありませんでしたが、本判決では、改めて教員の労働に対しても労基法32条が適用されることが確認され、さらに、管理者である校長には教員の労働時間を１日８時間、週40時間に収める時間管理についての配慮義務が存在すること、また、その義務に違反した場合は国家賠償請求の対象となるということを判示しました。本裁判においては、国家賠償そのものは棄却されましたが、校長にこのような義務が存在することが確認されたということは、今後の「働き方改革」に少なくない積極的な影響を与えることが期待されます。

３．認められなかった請求
―今後の展望

しかし、このような積極的な判示の積極的な側面にも拘わらず、原告の主張が棄却されたということについては、本裁判はやはり否定的な評価をせざるを得ません。上述の２つの論点に即していえば、①超勤４項目以外による超過勤務が労働時間としてカウントした、すなわち、こうした超過勤務が事実として存在し、なおかつ、労基法上の労働時間に該当すると判断したにも関わらず、その時間については労基法37条の適用が除外され、割増賃金の対象とはならないと判断したこと、②勤務時間外労働の時間の存在を肯定しつつも、それを勤務時間内の「空き時間」―例えば、専科教員による授業によって生じるもの―と相殺させることにより、時間外の労働時間を不当に低く見積もったこと、③このことに関わり、校長の時間管理配慮義務の存在は肯定したものの、本件については義務違反を認めず、それゆえ原告への損害賠償が認められなかったこと、この３点については、判示された積極的な論理を大きく裏切るものであると言わざるを得ません。特に、②については、原告の労働時間を細かく検証する一方で、あまりに教員の労働特性を無視した、まさしく机上の空論と言わざるを得ない前提・計算に基づいたものとなっており、批判は免れないでしょう。上級審が、上述の１・２の論理の必然的展開として、どのような判断を下すのか。私たちは引き続き裁判の動向を注視しなければならないでしょう。

おわりに

本件は原告の敗訴となりました。しかし、今後の裁判において、あるいは実際の「働き方改革」において武器となるロジックが判示されたことも事実です。こうしたロジックをどのように使うかということが私たちに委ねられています。判決においては、教員の働き方改革の必要性について踏み込んだ内容が判示されましたが、判示内容はもちろんのこと、こうしたロジックを改革に組み込んでいくことは求められるでしょう。

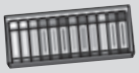
また、（裁判とは若干離れますが）働き方改革と教員の協働性を両立させるということも重要な論点だと思われます。学校における勤務時間削減を至上の目的とした結果、教員同士の連携というヨコのつながりが著しく減少したという話も聞こえてきます。教員間の冗長な関係が喪失することで、教員の仕事が個別化という孤立化が生じ始めているというのです。このような学校は働く教師にとっても、また、そこで学ぶ子どもにとってもいいものであるはずはありません。教師も子どもも、多くの人とつながり、見守られながら学校生活を送ることができる。こうした学校を、同僚関係を、教育関係を実現することが働き方改革のアルファでありオメガなのです。

（長崎大学）

子育て、孫育て奮闘記

遊ちゃん、葉ちゃん便り ③

阿部真弓



阿部真弓さんは、宮城で小学校教員を勤め、大塩小で定年退職後、大阪で暮らしている娘さんの子育てを支えるために大阪に移住。

障がいを持った孫育ての中で、宮城と大阪の教育環境の違いや教育の在り方などを考えます。

学校行事再開！

緊急事態宣言が解除されて1か月。彩都の丘学園では、学校行事が始まった。

11月6日（土）は運動会。去年はダンスのみの運動会だったが、今年は徒競走も加わった。遊ちゃんは運動会実行委員として、張り切って練習に励んでいた。学校から帰って、ユーチューブでダンスの練習をする姿がほほえましい。葉ちゃんは、音楽なしで楽しく踊って見せてくれる。1500名が参加する運動会。コロナ対策として学年ごとに時間を設定、出番でないときは教室で他学年の競技をライブ配信で視聴。保護者は学年カラーの名札を持ち、自分の子どもの競技が終わると総入れ替えである。コロナ前と比べると想像できないような運動会だが、孫たちはとても喜んでいた。

運動会の4日後は校外学習。去年は中止だったので2年ぶりのバス遠足であった。当日の朝、葉ちゃんがカレンダー（お手製の葉ちゃん専用）に書いてある「校外学習」の文字を指さした。とても楽しみにしていることが伝わってきた。

オンライン授業

第5波の真っただ中の2学期開始は散々だった。始業式前日（8月25日）の夕方、コロナ陽性者の知らせ、臨時休校の連絡。30日より学校が再開。9月3日から再び臨時休校。9日学校再開。16日から3度目の臨時休校。学校が正常に戻ったのは9月21日からだった。この間学校へ行ったのは7日間のみ、オンライン授業が5日（1日はホームルームのみ）行われた。大阪での感染大爆発に加え、児童・生徒数が1500名の学校では仕方のないことかもしれなかった。

オンライン授業。昨年度は、教科書の内容をこなすために夏休み前に行われたが、学校からの配信のみだった。今回はズームを使って、初めて双方向（学校、家庭）からの授業。テレワーク会議と全く同じである。画面には先生とクラス全員の顔が映し出されていた。

オンライン授業は大変である。難聴の葉ちゃんにはつきっきり。5時間オンラインになると、昼食を食べさせたあとすぐにタブレットに向かう。家庭に保護者がいる場合はなんとかなるが、いないと接続できずに1日が終わることもあるようだ。我が家はITに強い父親がテレワークをしているので助かっているが……。

先生も大変である。オンライン授業中、遊ちゃんが、「先生、A君がいない！」と言い出した。画面から姿が見えなくなったら教えてほしいといわれているらしい。授業をしながら小さな画面で30名の子どもたちの確認をするのは至難の業である。遊ちゃんは学校に行きたい、友達と会いたいとしきりに言っていた。

学校が再開されても、クラスには数名、感染を避けるためにオンライン授業を受けるというのが日常的になってきたようだ。

10月末、遊ちゃんが、腹痛のため登校できなくなった。学校へ連絡すると、教頭先生に、「オンラインにしますか？」と言われた。少し様子を見ていたが、よくならないのでオンラインに切り替えてもらった。この日は4人がオンライン授業を受けていた。その様子を見ながら、ふと15年ほど前に受け持ったK君のことが思い出された。私が受け持ったときは6年生。1年生の時から登校していない。たまに母親といっしょに放課後登校。登校すると教室に入り、自分のクラスの友達の写真をいつも見ていた。家庭訪問をすると、自分が家庭でやっていることを見せてくれた。あの時、今のようなオンライン授業があったらK君の生活はもっと違っていたような気がする。中学校では、放課後登校もなくなったと聞いている。コロナ禍の中で広がったオンライン授業、うまく使えば子どもたちを救えるものになるのかなと思った。でも、やっぱり子ども達は元気に学校へ行って勉強するのが一番だ。学校は人と人とが関わり合いながら成長するところだから……。

（大阪府箕面市在住）

おすすめ映画

『私は、ダニエル・ブレイク』2016年

佐々木忠夫

イギリス・ニューカッスル。59歳のダニエル・ブレイクは実直な大工だったが、心臓病で医者から働くことを止められた。

「雇用支援手当」の継続審査で心臓病とは関係ない質問ばかりされ、「就労可能」と判断される。そのため、「求職者手当」を申請しなければならなくなる。イギリスの「雇用支援手当」は働けない人、「求職者手当」は失業中の人ようだ。

職業安定所でロンドンから移り住んだケイティ親子と会う。彼女は時間に遅れてきたため支給停止。ダニエルも抗議をするが、追い出される。

ケイティはロンドンのアパートの雨漏り修理を要求しただけで追い出され、ホームレス用の施設で暮らした。一部屋に親子3人の生活で息子ディランが精神的に変調をきたし、ニューカッスルのアパートを役所から紹介され、ここに引っ越してきた。

ダニエルは親子の面倒を何かと見るが、不慣れなインターネットで手当の受給申請をし、形式だけの求職活動をしなければならない。ケイティも売春紛いの仕事をせざるを得なくなり、娘デイジーがいじめも受ける。

この不条理な制度で、何度も職業安定所に通っては断れる。耐えきれず、役所の壁に「私、ダニエル・ブレイクは……」と落書き。が、逮捕される。

これがかつては福祉国家のイギリスの現状。サッチャー政権の新自由主義によるもの。何とか生活保護を受けさせまいとする日本と同じ。

ケイティが紹介した申請代理人が「医師たちが審査に対して怒っている。勝てる」と励ます。ダニエルは陳述書を書き上げるが……。

ケン・ローチは社会問題を作品にしてきた名匠。この作品も新自由主義で追い込まれる庶民の現実を丹念に描く。

（小牛田農林高）

読書のすすめ（第6回）

久保　健

『デジタルファシズム』　堤未果 著　NHK出版　2021年

定年退職して、これまで無頓着だった税や年金、銀行口座や保険料、通販やカード使用で引き落とされる金額の内訳が気になるようになった。また、スマホを購入してテザリングでWi-Fi環境につなぐ「新しい生活様式」の試運転中である。そんな時、センターの研究課題であるGIGAスクール構想について学習するために本書を手に取った。

本書は、第1部：政府がねらわれる、第2部：マネーがねらわれる、第3部：教育がねらわれるの3部からなり、そのすべてでとても「恐ろしいこと」が述べられている。例えば、私たちはコロナ禍とオリンピック騒ぎの下で進められた、①改正国家戦略特区法（2020）、②デジタル改革関連法（2021）、③日米デジタル貿易協定（2020発効）、④RCEP（地域的な包括的経済連携）協定（2020）等々の法や協定に注意を払ってきただろうか？

これらの内容をよくみると、「早くデジタル化しないと世界に遅れる」という理由で諸々の規制が緩和され、私たちがZOOMなどの便利な道具を使って遠隔の仲間と交わした会話の中の様々な個人情報が（軍事情報や国家機密までも）無防備に収集され、また「手軽かつスピーディー」にキャッシュレスで支払った手数料の何パーセントかが吸い上げられて、米・中のグローバル企業（さらにそれを介してその政府）の手に握られることを防ぐすべがないのだ。そうした中で私たちは、「スマホ決済は便利」「ポイントがラッキー」「マイナンバーカードを作れば2万円」などの甘い誘いにのせられていはしないだろうか？

教育では、1人1台配られたタブレットを使ったオンライン教育の内容と方法がどうなるかが議論され模索されている。それは、デジタル化によって教育が子どもを不幸にする方向に変質しないよう護るために大切だが、ただしそれは学校教育という土俵の上でのことだ。その下では、教育が金儲けの対象となることを梃子に、教科書やデジタル教材の規制が緩和され、「個別最適学習」の名の下で子ども1人1人の成績や行動がデータベース化され、目を向け合い肉声を交わしての協働学習がなくなり、教師の仕事がAIや無免許の非正規雇用者に取って代わられ、しまいには学校そのものが校舎もなく教師もいないヴァーチャル空間に移されるなど、公教育そのものの存廃が密かにして進行しているのだという。

この土俵の上と下で同時進行しつつある事態がクリアーに見えるようになるために、本書の熟読（できれば仲間と学び会いながらの）をすすめたい。

子どもと学校

清少納言も悩んでいたのかもしれない

石垣　耕希

高校2年生の古典の授業を担当している。週2時間の限られた時間の中で、古典の世界を味わい自分のものの見方を広げてほしいと、試行錯誤を繰り返している。

先日、取り上げた『枕草子』は、日記的な章段も多く含まれており、清少納言が不安や動揺を率直に綴っている部分が少なくない。例えば、第102段では、風が強く雪が降るある日、当代の教養人、藤原公任から下の句「少し春ある心地こそすれ」が送られ、上の句を即座に返句するよう求められる。彼女は誰にも相談できず、狼狽する。とっさに公任の引用したであろう『白氏文集』を踏まえて、「空寒み花にまがへて散る雪に」と返句する。返句した後も、公任や気後れするような面々を思っては、一喜一憂する一人の女性の姿がある。

授業の中で、「才媛」としての清少納言の人物像が立体的になる。生徒の感想よりいくつか紹介したい。

「教養のある人　機転が利いたり、発想力のある人、しかし、一般人のように悩んだり、不安になったりするような人間味のある人」

「いつもは冷静だったけど突発的に来たとき、一人でできないと思いあせることがある」

「どんな人でも焦ったり『どうにでもなれ！』みたいな思いになるのがびっくりした」

「清少納言はけんそん（謙遜）して自分を低め内気で、意外と強いところもあるんだなと思った」

「挑戦状の下の句に対し、読み取った上の句がすごいと思った。私が平安時代に生まれていたら、終わっていたと思う」

「強い思い（心・芯）をもっている気のきく、頭がよく回る。知識が豊富」

「少し心配性な人だと思った。マイナスに考えているけど、いい句を書いている」

「季節や時間をたとえる文を入れているから情景が思い浮かびやすい文を書く人だった。選んでいる言葉から華やかな人だと連想した」

清少納言が紡ぐ一語一語にこだわり、古語の面白さや現代語と異なるニュアンスをかみしめながら、作者の実像に少しずつ迫っていく授業。生徒の素朴な反応や疑問、意外な反応が実は深く読み取る手がかりを与えてくれる。

教科書の字は、整っていてお行儀がよい。しかし、肉筆のように一語一語に切迫した何かが含まれている。「温もり」というか「人肌の感覚」が残っている。古典に描かれた世界と現在とが連続しており、文章の書き手が実は一人の人間で、自分と近しい存在と感じられると、つまり、「どこかでつながっている感覚」を持てると、安心感がもて、世界や人間に対する信頼や肯定的な見方が生まれ、様々なものごとに自分から窓を開こうと思えるのではないか。飛躍した着想だが、時代の試練を経た言葉の「鉱脈」にぶつかるとそれは人を変える確かな力になると信じる。

『枕草子』の後は、『蜻蛉日記』を読んだ。作者藤原道綱の母は生まれたばかりの息子を抱え、よるべない身の上の中で、不実な夫への疑念、寂しさを歌に込めて詠んだ。平安時代様々な制約を受けながら生きた女性の言葉を生徒たちはどのように受け止めたのか。

A「…道綱の母は少し前に、お父さんが遠くへ行ってしまい、道綱が生まれたばかりの出来事なので、不安やさびしさなどつらい

気持ちでいるけれど、耐えて、心の強さが出ていたと思います。清少納言も、道綱の母も、女性の立場が弱い時代で、歌を詠み、強く生きたことが、短歌として今に伝わっていて、すごいなと思いました。」

B「私は平安時代の文章を読んで清少納言、藤原道綱の母どちらの女性も知的で素直な人物だったのではないかと思いました。短歌は現代でいうところの手紙にあたります。自分の考え、心境を文章にし手紙として書くことはどの時代であっても簡単ではないはずです。短歌と手紙様式は違えど気持ちを文字にするということに変わりありません。いくつもの言葉の中から自分の気持ちにあう言葉を選び、五七五七七と決められたルールの中でそれを表現し、相手に伝えようとする彼女らはとても知的で素直な人たちだったのではないだろうかと私は思いました」

清少納言はその才能ゆえに、宮中の様々な人間関係の中で、周囲の評価を気にしたり、胸がつぶれるような思いを幾度もしたことだろう。しかし、その時自分の気持ちを綴ることで、その思いを見つめ、乗り越え、前に進もうとしているのではないか。彼女が自分の思いを綴り、弱さを越えようとしたことを、Aの感想では、「強さ」と表現したのだろう。道綱の母も夫の浮気と不誠実さのために、何夜も心細い夜を過ごしたことだろう。彼女も自分の内面を見つめ、逡巡の末に夫に自分の寂しさや悲しさを、「嘆きつつ……」の有名な一首を詠んだのだ。様々な情念を昇華し、純化していく中で詠んだ和歌には、恨み言のように思われる言葉の奥底に「夫への愛」があるとある生徒が指摘した。それは彼女自身さえも自覚していたのかわからないが、素朴で強い自分の思いを見出し、これを夫へ伝えようとしたものではないだろうか。（日記では作者の思いが夫に伝わったように思えないのがなんとも残念であるが）。自分に対しても、夫に対しても、「透明」で「誠実」にあろうとした、道綱の母のこのような姿勢を「素直」と表現したのではないか。

言葉の奥に潜む何かを見ようとすると、不思議なことに、言葉そのものの力に気付く、そのようなことが少なくない。AとBともに、言葉のもつ根源的可能性、すなわち、自分の内面を束ね、自らを導くこと、自分自身及び他者と深いところで繋がることができることを洞察しているのではないか。ここには、言葉自体への信頼感がある。

高等学校では、来年度から新学習指導要領の実施を控え、観点別評価の導入や周到な単元計画や年間計画（シラバス）の作成等、多忙感に拍車がかかる。

国語では、文学教材の見直しが進み、実用文の扱いの比重が大きくなる。文学教材の扱いも作品世界を深く読むことよりも、表面をなぞるような「発表」や「言語活動」等、情報活用能力が重視される。学習指導要領に沿ったシラバスに基づき、煩雑な評価の網の目で生徒の学習活動を縛ることは、生徒の実態に即応し、柔軟で創造的な授業づくりを萎縮させてしまうのではないか。

現場が汲々としているその間隙を縫うように、ＩＣＴ機器、学習の便利なツール、診断テストやその対策教材などが学校現場に入る。授業者の想いを生かした、工夫を凝らした授業を作るのが困難にはならないか。

学校現場をとりまく昨今の風潮は、吟味や検討なしに、与えられた目標に「最短ルートをひたすら走れ」と言われている印象を受ける。私だけだろうか。

生徒の様子から、落ち着いて、立ち止まり、深く学びたいという願いを強く感じる。

コミュニケーションツールが飛躍的に進化する一方で、人との関わりは益々疎遠で不器用になっていないだろうか。自らは匿名で仮面を被り、誰かに罵声を一方的に浴びせる、ネットでの中傷を耳にする度、言葉への信頼はないと思う。それどころか、「私はあなたと話してもわかり合えない、話したいとも思わない」、「人とは、エゴイステックな欲求を最もらしい言葉で言うものだ」という、言葉への不信がある。子どもたちのＳＮＳトラブルを見る度にそう思う。ＧＩＧＡスクール構想、教育のデジタル化は本当の意味で、言葉との出会いをつくりだせるのだろうか。立ち止まって考えなければと強く思う。

（岩出山高）

わたしの出会った先生 34

ひとりはみんなのため、みんなはひとりのため

出浦 由美子

戦後民主教育が動き出した私の小学校入学当時は、「青い山脈」の歌詞を絵に描いたように「古い上着よ（戦後の価値観）さようなら♪」、戦争の恐怖から解放され「雪崩が消える♪　花も咲く♪　今日もわれらの夢を呼ぶ♪」ような日々を迎えていたように思う。

私の出会った忘れられない先生は、3年生の担任太田政和先生。新制国立大学卒業ほやほやで、真っ黒い髪にポマードがピシッときまった面長の格好いい先生。教育実習で担任した附属小学校の生徒に思いが残っていたのだろう、私にとっては知らない相手に何度か手紙を書かされた。返事も届き、「手紙」の面白さを知った。先生は学活（当時の科目名は?）の時間に黒板に「自治」という文字をでっかく書いて、その意味を熱心に解明してくれたが、私はそれがどうしてこんなに大切なことなのだろうかとボーと聞いていた。教育研究サークルも盛んになって（「生活綴り方」の流れがあったのだろうか）、先生は時々出張し、翌日にはどんなことを勉強してきたか、生き生きと語ってくれた。先生は収穫一杯だったかもしれないが、こちらは先生の留守の間、常に迷惑かけるF君（問題児?）をめぐりクラスでのてんやわんやを競って訴えた（当時、担任がいなくても補充の先生は入ってくれなかった）。そこで飛んでくるのが先生からの大目玉。「ひとりはみんなのため、みんなはひとりのため」がクラスのモットー（みんな＝33人）クラスの人数33人は、いまだに耳にタコができるほどこびりついている。「何故32人で力を合わせてF君の行動を止められなかったのか」という長い説教になる。先生のいないある日、またF君が教室を抜け出した。32人（みんな）は彼（ひとり）を何としても教室に連れ戻すために一斉に追いかける。「あちらに回れ」「こっちから行け」と挟みうちするために号令をかけ合いながら。田んぼの畦道を何方にも分かれて追い駆け回った。1クラスすっかり2～3時間（?）以上も教室を空けても、他の先生方からのお叱りはなかった。何しているか無関心だったのかも。私たち自身、教室で自習しているより駆け回っている方が痛快だったし、何より「32人はF君のため」にやっているという使命感・正義感で必死だった。翌日には「32人はいかにひとりのために頑張ったか」を先生に自慢げに報告し合った。赤ん坊（子守り）を背負ってくる子がいると、みんなで面倒をみてやったりと、このモットーでクラスの心は一つになったことは確かだ。

ところが2年目（4年生）の夏、先生から「この学校をやめることになった」と「別れ」が伝えられた。あまりに突然で悲しくて皆で「ワーワー」声が枯れるほど大声で泣いた。先生の目も真っ赤だった。2学期が始まって太田先生はもういない。

先生からは、「校舎の屋上からはるかに海が見える兵庫県の大きな学校にいます」という手紙が届いた。海など見たことない33人にとって想像できない世界に、先生は行ってしまったのだと別れを認め合った。その後厄年等でやった「33人の同級会」の折に話題に出るぐらいとなっていた。

ところが退職4年目の夏、父の戦死地を訪ねる「東部ニューギニア慰霊の旅8日間」に参加し、全国から集まった戦没遺児20名と交流した。その帰路の機内で、隣席のAさんが兵庫県在住とのことで、つい太田先生のことを話題にした。「探してみましょうか?」と言ってくれたが50年以上も前のこと故、奇跡もありえないと思っていた。ところが何と兵庫県教委に依頼して探し出してくれた。しかし先生は数年前に亡くなられていた。その後先生の奥様から戴いたお手紙では、太田先生は生前「自分の原点は……」と、ことある度に秋田の初任地のことを話していたとか。そして、退職に当たり書かれた先生の文章が同封されており、その文中に「初任地を年度途中で去ることになった事情と、今も忘れていないその時の教え子たち」のことが書かれていた。

私の出会った先生「太田政和先生」は、私たちとはたった1年数か月だったが最後の最後まで忘れないでいてくれたのだ。

（元教員）

相談センター報告
（第25回）

大人があなたたちの幸せを守る

～相談センターの出会いから考える子どもたちの今～

みやぎ教育相談センター相談員　金谷　光子

この2年近く目に見えないウイルスに世界中が翻弄されました。最近は感染者が減ってきましたが、世界を見れば、脅威は波を繰り返して今も続き、感染で亡くなった人々のあまりの多さに心が痛みます。離れた家族や友人に2年も会えないなんて、これまでになかったことです。誰もが安心して生活できる日が早くきてほしいと願います。

相談センターでは、昨年から、相談時間の短縮や勤務体制の縮小というコロナへの対応をしながら、何とかつながりを持ち続けることができました。また、新しい所長は市内、県内の学校をセンターの相談の案内に回ってくれました。不安が多い毎日、共に考えることが心を保つ一助になればと願い、お話を聴く日々が続いています。

センターでの出会いからは今の社会の問題も見えて、いろいろなことを考えます。何年も夫の単身赴任が続き、子育ての悩みを一人で抱えなければならなかった方、社会の働き方はこれでいいの？幼い頃の育ちの中で親から受けてきた心の傷が今でも心や体を苦しめて悩む青年。大人になってからも長く苦しむ自分の経験を若いお父さんお母さんに話してほしいと訴えます。子どもに接するときは脅かさない、命令しない、子どものリズムを大切に待つ、大人も楽しむこと……これは最近の彼の言葉です。痛みを和らげる方法と楽しみを自分なりに見つけて生きています。いじめや人間関係ではなく、授業がわからない、ついていけないことが原因で不登校になっているお子さんたちのことも心配です。個別に困っていることを聴く、少人数の学習など、教える側の工夫がうまくできたなら……と思うのですが、学級の人数も多く先生方の仕事の量も過重、一人一人の声がなかなか届かないようです。今年やっと35人学級への引き下げが決まりましたが。

以前勤めていた養護学校（特別支援学校）高等部に地域の学校から入学してきた生徒から、勉強がわからない教室でお客さんのように過ごしていたつらさを聴いたことは今も心に残っています。機会あるごとに彼のことや言葉を話せない障がいのある子どもたちのことを伝えてきました。私たちが聞き取れない外国語の飛び交う中で不安になる気持ちと同じではないかと。学校に行けなくなってしまう気持ちもわかります。子どもたちは良い環境の中で育てられているでしょうか。

そんななか、センターつうしん103号の子どもを守る会会長増山均氏の論文を共感をもって読みました。コロナ禍と子どもの権利条約についての中で、児童憲章制定からちょうど70年ということにも触れられていました。『児童は人として尊ばれる』『児童は社会の一員として重んぜられる』『児童はよい環境の中で育てられる』という理念は、今こそ大切にしなければと思います。

児童憲章は母子手帳に全文が掲載されています。母と自分をつなぐ記録である母子手帳が、亡くなった両親の家にしまってありました。表紙を開くと左の表紙裏に児童憲章が載っていて、右に児童憲章から数年後の出生届、歴史を感じました。そして、子どもや孫の手帳にも今でも児童憲章が収録されているので、私の子どもたちには是非読んでほしいと伝えました。長女は「これは母親も父親もちゃんと読むべきだね」と言っていました。

制定から70年の今年、家庭や学校で、子どもたちに向けて、大人があなたたちの幸せを守ると約束したということを話してほしいと思いました。

家の前の通学路を小中学生が今日もマスクをして登校していきます。子どもたちの健気な姿を見送りながら、この子たち一人一人が大切にされ、楽しい学校生活を送ってほしいと願っています。

「みやぎ教育相談センター」のご案内

TEL ０２２―２７２―４１５２

相談受付内容

進路・不登校・ひきこもり・いじめ・家庭生活・教職員の悩みなど。

日曜と休日をのぞき10時から17時

〈土曜：10時から15時〉

ただし夏休みなど長期休業期間は、相談センターも一定期間，休業日があります。

秘密は厳守します。相談は無料です。

ひと言

何のために学ぶのか？

高橋　満（センター運営委員）

「何のために学ぶのか」。つまり、「学ぶ目的とは何か」、という問いである。あるいは「よい教育」とは何か。近年、これまでほとんど頭に浮かぶことのなかった「問い」を考えている。この「問い」は、教育研究のもっとも基本的な問いであるはずだが、日本の学界を見ても、ほとんど意識化された上で課題を設定し、分析しつつ研究しているとは思えない状況がある。教師の皆さんは、どのように考えるでしょうか。「よい成績をとる」、「いい学校に進学する」、そうすると、いい就職ができて、「幸せな」暮らしができる。一般には、こう考えるし、こうした人生の航路をたどることが推奨される。この思考では「よい教育」とは進学学力を高めることであり、それを実現する学校の教育ということになろう。この思考の延長線上に、流行の「根拠にもとづく実践」とか、「根拠にもとづく政策形成」という転倒した考え方が生まれる。

いや、そうじゃない。とすれば、どう考えたらいいのであろうか。暫定的な理解をわたくしなりに整理してみた。教育に携わる仕事をされているみなさんにはぜひ、一度じっくり考えて欲しい、そんな規範的な「問い」である。

子どもの風景「作品について」

千葉　早苗（宮城作文の会）

この時の学級は毎日トラブル続きで、大きな声で叱りつけ、いつも不機嫌な表情で子どもたちを押さえつけていました。それでも何とか子どもたちの良いところを見つけ、子どもたちとつながらなくてはと必死に作文ノートに赤ペンを入れていたのを思い出します。

柊さんは大きなトラブルは起こさないものの、いつも後ろを向いたり、隣の子とおしゃべりをしたり落ち着かない子の一人でした。そんな柊さんがお母さんにお願いされた回覧板を届けた帰り、大きくきれいな月が出ていることに気付きます。そしてその月をながめながら家に帰るのです。そんな素敵な感覚を持った子が自分の学級にいる。一枚文集に載せてみんなで共有したい。そして何よりも柊さん自身に、いいところに目を向けて書いているよと気付かせてあげたいと思いました。また、この作品をきっかけに子どもの書いた文をもっともっと丁寧に読んであげなくてはと私自身が思うようになりました。

書いて読み合い、また書いてを繰り返す中で、「今日はこの作品を紹介して、ここをほめよう。」そう思いながら教室に向かうようになりました。

センターの動き

〈10月〉
3日　道徳と教育を考える会　江戸期の教育（中江藤樹の「孝」の思想）
8日　事務局会議
12日　こくご講座世話人会
23日　『教育』を読む会　第7回研究部会（学校現場の実態を聞く）
25日　ゼミナールSirube「バートランド・ラッセルの教育論①」
30日　みやぎ教育のつどい開催

〈11月〉
13日　増山均さん『鈴木道太の実践に学ぶ』講演会
24日　第2回運営委員会
26日　事務局会議
27日　『教育』を読む会　国語なやんでるた～る（5年『ないた赤おに』、4年『世界一美しいぼくの村』）第8回研究部会（GIGAスクール・アンケートの分析について）
28日　ゼミナールSirube「バートランド・ラッセルの教育論②」

〈12月〉
3日　国語なやんでるた～る（4年『世界一美しいぼくの村』授業づくり）
4日　こくご講座「詩の授業」（提案・春日辰夫）
10日　国語なやんでるた～る（4年『世界一美しいぼくの村』）
12日　道徳と教育を考える会　江戸期の教育（熊沢蕃山）
14日　こくご講座世話人会
18日　『教育』を読む会　第9回研究部会（GIGAスクールアンケートの分析と検討）
20日　ゼミナールSirube「ユングの教育論」
24日　事務局会議

編集後記

約2年に及ぶコロナ禍の中で、「学校」に関わる二つの大きな出来事。一つは「義務教育標準法」の改正による小学校の35人以下学級への道が開けたこと。二つめは、GIGAスクール構想下でのICT教育の推進だろう。

前者は2年前、安倍元総理の鶴の一声で始まった全国一斉休校。その結果、分散登校や部分登校を行う中で、少人数学級の素晴らしさを実感したことが、長年続けてきた署名運動と一体となって実現したものであることは疑う余地がない。

後者で思い出すのが、2007年にカナダのジャーナリストであるナオミ・クラインが刊行した「ショック・ドクトリン」（惨事便乗型資本主義）である。今回のコロナ禍でも、経済産業省の主導で企てられていたGIGAスクール構想を、チャンス到来とばかりに計画年度を前倒しして一気に土足で学校に入ってきた。子どもたちに一人一台のタブレット配布である。配ることで、今度は「さあ使え」「こんなことができるぞ」と煽り、教師たちは、やれ研修だ、さあ授業研究だと追い込まれている。GIGAスクールとは何なのかは、ほとんど議論されずにである。行き先が不明なまま走らされているといっていいだろう。

教師と子どもの関係は、タブレットの中の文字などで繋がれていく。折角、少人数学級になったのに、なんともったいないことだろう。現場を離れて12年だが心配でならない。そんな時、小野寺さんの俳句・短歌の授業や、石垣さんの「枕草子」の授業に流れる、子どもと教師のあたたかい息づかいに救われます。

（仁）

発行：（一財）宮城県教育会館 みやぎ教育文化研究センター　2021・12・25　発行責任者：高橋達郎
〒981-0933 仙台市青葉区柏木1-2-45 フォレスト仙台4F　TEL 022-301-2403　FAX 022-290-4026
http://mkbkc.forestsendai.jp E-mail mkbkc@forestsendai.jp　印刷 株式会社きた出版